View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

島根県立大学短期大学部出雲キャンパス
研究紀要　第４巻，129－136，2010

地域活動を“いきいき”として支えている人の要因

青山　美保[*1]・井手　喜子[*2]・新志　春菜[*3]・新　　裕美[*4]
池田枝里子[*5]・池本　佳子[*6]・大屋　亜美[*7]・河添　千穂[*8]
川西　志保[*9]・川村　幸子[*10]・吾郷美奈恵

概　　要

本研究の目的は，地域活動を“いきいき”として支えている人の要因を明らかにし，どうしたらそのような人を増やせるのかを検討することである。地域に住み，地域において“いきいき”とボランティアや役員として活動している13名を対象に，半構成的インタビューを行った。ＫＪ法を用いて分類･図解した結果，“いきいき”と活動を続けられる要因は「いきいきと活動するサイクル」と「支援するサイクル」の２つに分けられ，「いきいきと活動するサイクル」を回すためには「支援するサイクル」を円滑に回す事が必要であった。二つのサイクルが円滑に回り，地域活動を発展し続ける事で“いきいき”と活動する人が増えると考えられた。

キーワード：地域づくり，コミュニティエンパワメント，地域住民

Ⅰ．緒　　言

地域は，そこに住み暮らしている住民や地域に関わる人，NPOやボランティア団体，教育機関，公民館･図書館等の社会教育機関，企業，行政機関等の様々な主体によって構成されている。このため，地域づくりとは，地域住民等がその他様々な主体とともに社会の形成に主体的に参画し，互いに支えあい，協力しあうという互恵の精神に基づき，パートナーシップを形成し地域の課題を解決する活動である。それは，社会の問題を自分自身の問題として考える新しい「公共」の観点に立って，「自らの地域は自らつくる」という意識を持って行う主体的な活動でもある（文部科学省，2004）。

近年，コミュニティの希薄化が進んでおり，住民の地域社会に対する態度や意識，すなわちコミュニティ意識を育成することに重要な意味を持ち，地域における住民組織活動やグループ活動が盛んになると，その活動に参加するメンバーのコミュニティ意識は促進される（村山，2007）。そのなかでもボランティア活動を行うことは，他人に共感すること，自分が大切な存在であること，社会の一員であることを実感できることにつながると考えられている（文部科学省，2004）。総務省社会生活基本調査によると平成18年に全国でボランティア活動を行った人は29,722,000人/年，行動者率は26.2％であり，５年前と比べて2.7％低下している（総務省，2006）。一方，平成20年度の国民生活選好度調査報告では「自分の住んでいる地域の人々との交流があることは大切だ」と思っている人は90.5％であるのに対し，「ボランティア活動に積極的に参加したい」と思っている人は60.8％である（内閣府国民生活局，2008）。「ボランティ

[*1] 松江市立病院
[*2] 宇治市役所
[*3] 広島市立安佐市民病院
[*4] 財団法人京都工場保健会
[*5] 医療法人三省会村上病院
[*6] 鳥取県立厚生病院
[*7] 関西医科大学附属枚方病院
[*8] 松江記念病院
[*9] 伯耆町役場
[*10] 医療法人社団水光会総合病院

ア活動」の行動者率を都道府県別にみると，鳥取県が34.5％と最も高く，次いで島根県及び滋賀県が34.0％である（総務省，2006）。

Ａ地区ではコミュニティセンターの職員やボランティアを中心に，子どもから高齢者までを対象にした様々な地域活動が展開されている。Ａ地区のこのような地域活動は，日本の文化であり，子どもから高齢者まで大家族のように一緒にいるのは自然なことと考えられる（佐瀬，2009）。我々はコミュニティセンターの地域活動に参加し，携わっている人々が“いきいき”と楽しそうな姿に感銘を受けた。今後，Ａ地区をさらに活性化するためには，地域との関わりが少ない世代にも働きかけて全世代が共同し，コミュニティ意識を育成することが必要である。

今回は，地域で“いきいき”と活動を続けられている人の要因を明らかにし，どうしたらそのような人を増やせるのかを検討した。

Ⅱ．方　　法

１．調査期間

調査は平成21年11月９日から11月18日までの10日間である。

２．調査対象

対象はＡ地区に住み，地域活動にボランティアや役員等で積極的に参加し“いきいき”と活動していると判断された13名である。対象の選定は，Ａコミュニティセンターのセンター長とチーフマネージャーに依頼し，推薦を受けた全員である。

３．インタビュー内容

インタビューの内容は①個人属性，②どんな地域活動に参加しているか，③地域活動参加のきっかけは何か，④現在地域活動をしていてどんな感想を持っているか，⑤地域活動を続けられる理由は何か，⑥地域活動を人に勧めたいと思うか，その理由は何か，の６項目である。

４．インタビュー方法

推薦を受けた対象にはインタビューの目的や方法，内容，倫理的配慮について文書を配布し，承諾を得た。その後，対象者個々に希望する日時と場所を決め，面接によるインタビューを行った。インタビュー内容は対象の了解を得て，詳細に書き記録した。インタビューに要した時間は30分程度で，２名で担当した。

５．分析方法

分析はインタビュー内容を一義一文でラベル化し，分類・図解した。分析はＫＪ法の考え方と手法を用い，研究者11名の合意の基に，類似性・異質性を見ながらカテゴリー化した。さらに，個人と環境を意識しながら，時間的経過にそって関連するカテゴリーを分類し，構造を検討した。

Ⅲ．倫理的配慮

Ａ地区のコミュニティセンターのセンター長とチーフマネージャーに研究の主旨を文書と口頭で説明し，対象者の推薦を依頼した。対象には①研究の主旨及びインタビューへの参加は自由意思であること，②協力の有無にかかわらず利益・不利益がないこと，③得られたデータは対象者個人が特定できない方法を用いて分析し，④研究以外の目的では使用しないこと，⑤インタビュー内容は終了後に破棄すること，⑥研究結果を発表会・学会にて公表することなどを記載した文書を事前に配布し，インタビュー時に口頭で説明し同意を得た。

Ⅳ．結　　果

１．対象の概要

対象の概要を表１に示した。対象は男性２名（15.4％），女性11名（84.6％）で，60歳代が７名（53.8％）で最も多く，平均年齢は64.2±8.5歳であった。男性２名は何れも「退職」した者であり，女性は６名（46.1％）が「有職」の者であった。家族構成は「夫婦２人暮らし」「２世代世帯」が多く，介護や子育てを主となって行っている者はいなかった。Ａ地区に住んだきっかけは,「家を建ててから」が６名（46.1％）で一番多く,次いで「Ｕターン」が４名（30.7％）

表１　対象の概要

		全体	男性	女性
	性別（名）	13（100%）	2（15.4%）	11（84.6%）
	平均年齢（歳）	64.2±8.5	67.5±3.5	63.6±9.1
職業の有無	退職	7（53.8%）	2（100%）	5（45.5%）
	有職	6（46.1%）	−	6（54.5%）
	計	13（100%）	2（100%）	11（100%）
家族構成	夫婦２人暮らし	5（38.4%）	−	5（45.5%）
	２世代世帯	5（38.4%）	1（50.0%）	4（36.3%）
	３世代世帯	3（23.1%）	1（50.0%）	2（18.2%）
	計	13（100%）	2（100%）	11（100%）
Ａ地区に住んだきっかけ	生まれてから	2（15.3%）	−	2（18.2%）
	家を建ててから	6（46.1%）	−	6（54.5%）
	Uターン	4（30.7%）	2（100%）	2（18.2%）
	結婚してから	1（ 7.9%）	−	1（ 9.0%）
	計	13（100%）	2（100%）	11（100%）

表２　活動に参加したきっかけと活動内容

（重複回答あり）

	地域活動の内容	名（%）
きっかけ	誘われて	9（69.2%）
	コミュニティセンタースタッフ	6（66.6%）
	知人	4（44.4%）
	社会福祉協議会の役員	3（33.3%）
	自主的	4（30.7%）
内　　容	子育て支援部	10（76.9%）
	通学合宿	8（80.0%）
	登下校見守りグループ	2（20.0%）
	高齢者の部	7（53.8%）
	いきいき交流会	3（42.8%）
	ミニ交流会	2（28.5%）
	福祉推進員	2（28.5%）
	障害者福祉部	1（ 7.6%）
	在宅介護者会	1（ 7.6%）
	専門的な知識・技術	10（76.9%）

であった。

活動に参加したきっかけと活動内容を表２に示した。きっかけは，コミュニティセンターのスタッフや社会福祉協議会の役員から「誘われて」参加した者が９名（69.2%）であり，退職して地域の役に立ちたいという思いから募集を見て「自主的」に参加した者が４名（30.7%）であった。参加している活動は，「子育て支援部」が10名（76.9%），「高齢者の部」が７名（53.8%），「障害者福祉部」が１名（7.6%）であった。また，看護師や栄養士などの専門的な知識・技術を活かして活動している者は10名（76.9%）であった。

２．“いきいき”と活動を続けられる要因とその関連

インタビュー内容から得られたラベルは181枚であった。地域活動を“いきいき”と支えている人の特徴をテーマに分析した結果，『いきいきと活動するサイクル』と『支援するサイク

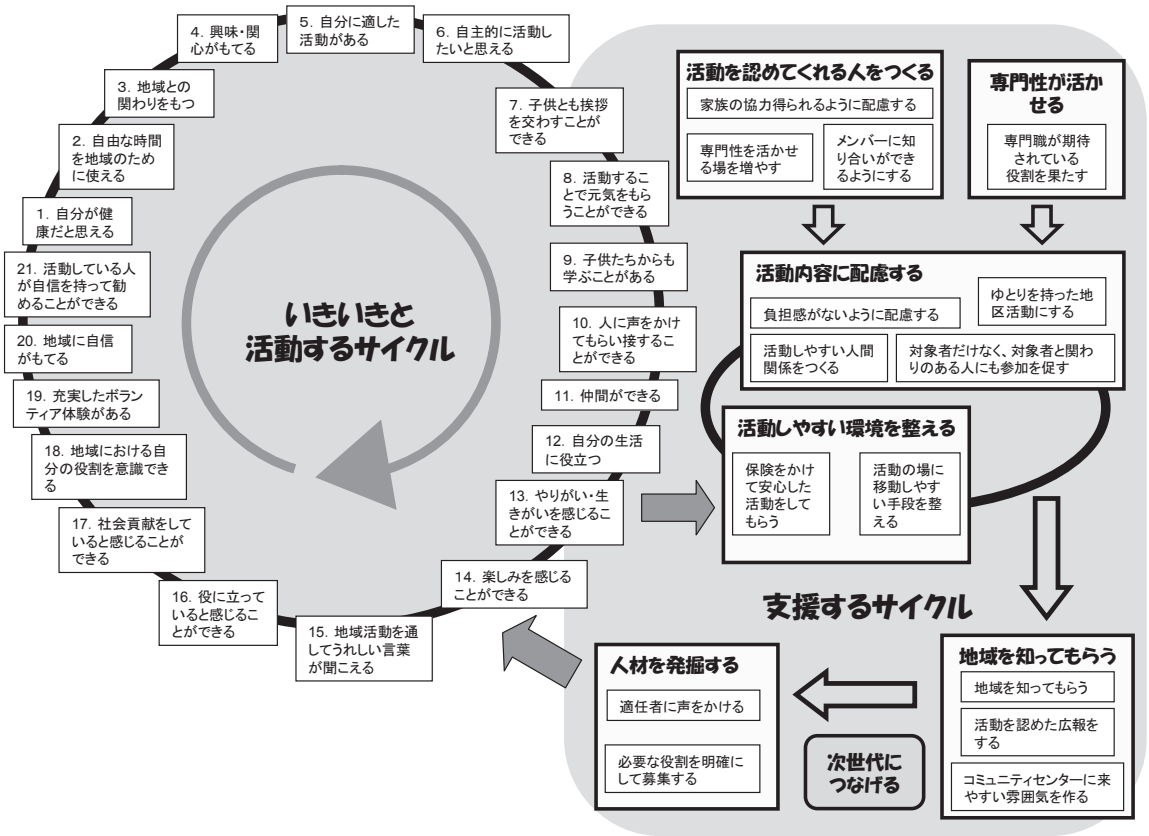

図１　『いきいきと活動するサイクル』と『支援するサイクル』の要因とその関連

ル』の２つに分類され，それぞれの要因とその関連を図１に示した。

『いきいきと活動するサイクル』として21のカテゴリーが抽出された。このサイクルを回す為には「自分が健康だと思える」「自由な時間を地域のために使える」ことが基本であった。「地域との関わりをもつ」ことや地域に「興味・関心がもてる」「自分に適した活動がある」「自主的に活動したいと思える」ことが活動を始めるきっかけとなっていた。地域活動に参加することで「子供とも挨拶を交わすことができる」「活動することで元気をもらうことができる」ことや，「人に声をかけてもらい接することができる」ことで「仲間ができる」「楽しみを感じることができる」ことにも繋がっていた。また，「地域活動を通してうれしい言葉が聞こえる」ことで「役に立っていると感じることができる」。さらに，やりがい・生きがいを感じ，「地域における自分の役割を意識できる」ことに繋がっていた。このような体験から生活が充実していくことで，「活動をしている人が自信を持って勧めることができる」ようになる。

『支援するサイクル』は［活動を認めてくれる人をつくる］［専門性が活かせる］［活動内容に配慮する］［活動しやすい環境を整える］［人材を発掘する］［地域を知ってもらう］の６カテゴリーに分類できた。「活動を認めた広報をする」ことや「コミュニティセンターに来やすい雰囲気を作る」ことで［地域を知ってもらう］ことができ，「必要な役割を明確にして募集する」し「適任者に声をかける」など［人材を発掘する］ことが重要であった。［地域を知ってもらう］ためには「負担感がないように配慮する」ことや「活動しやすい人間関係をつくる」など［活動内容に配慮する］ことと「保険をかけて安心した活動をしてもらう」「活動の場に移動しやすい手段を整える」ことで［活動しやすい環境を整える］ことができていた。また，「家族の協力が得られるように配慮する」「メンバーに知り合いができるようにする」ことで［活動を認めてくれる人をつくる］とともに，持っている知識・技術をいかして［専門性が活かせる］ことも重要な要因となっていた。『いきいきと活動するサイクル』をまわすためには，このよ

うな『支援するサイクル』が必要であった。

Ⅴ．考　　察

対象の平均年齢は64.2歳であり，壮年期から老年期への移行期で，「自分が健康だと思える」「自由な時間を地域のために使える」ということが地域活動を行ううえでの前提条件であると考えられる。一般に，老年期は定年退職等の社会的離脱により自由な時間が増大する。また，心身ともに健康であり，かつ社会参加への意欲が高い高齢者にとって自由な時間をボランティア活動に割り当てることは，彼らの生活満足度やＱＯＬの維持・向上に有効である（坂野，2004）。従って，地域活動の参加者を増やすためには退職というライフイベントを迎える者に働きかけることは有効であると考えられる。そして，それらの人々を対象とした情報提供体制や多彩な地域活動のプログラムを作成し，参加のきっかけづくりを推進していくことが必要である。

対象の中には介護や子育てを主体で行っている者はいなかったが，半数は有職者であった。平成15年度国民生活選好度調査報告によると，地域活動への参加を妨げる要因としては，活動する時間がないこと（35.9％），参加するきっかけが得られないこと（14.2％），身近に団体や活動内容に関する情報がないこと（11.1％）が報告されている。また，参加を妨げる要因として「参加するきっかけが得られないこと」と回答した者のうち82.3％が「今後は活動に参加したい」と回答している（内閣府国民生活局，2003）。これらの人は条件が整えば地域活動に参加する可能性があると推察される。有職者であっても自由な時間を地域のために使える意識が大切で，参加するきっかけや活動に関する情報が得られれば住民の地域活動への参加につながると考えられる。地域の人々はそれぞれの人生で，多くの知識，知恵，経験，能力を培ってきている（山崎，1995）。今回は，13名中10名（76.9％）が栄養士や看護師等の専門的な知識や技術を活かして活動していたことから，専門性や得意分野を発揮する場があることが地域活動の参加につながると推察される。また，活動において自分が役に立っているという体験が，やりがい・生きがいになり，地域に貢献していると感じ地域における自分の役割を認識すること等につながっていると考えられる。

『いきいきと活動するサイクル』がまわる要因として，地域活動を行うことで仲間ができることや，やりがい・生きがいを感じることが重要であった。ボランティア活動の魅力は，大きく分けると人の役に立ちたいという他者の利益のための場合と，自分の経験を増やし視野を広めたい，多くの人と出会える機会を得たい，という自分のためにする場合の二つがある（園部，2008）。これらのことからも，地域活動をすることにより，他者と自分の双方に利益が得られることが地域活動の魅力となっている。地域活動に対して活動者自身が高い満足感を得られることがわかれば，地域活動の参加のきっかけとなり，“いきいき”と活動できると考えられる。

参加した動機は「誘われて」が９名，「自主的」が４名であった。実施しようとする事業の趣旨や対象，問い合わせ先等の情報を地域全体に広く周知できれば，対象者が意思を示してくれるだけでなく，知人・友人が対象者に参加を勧めるといったこともあり得る（宮崎，2006）。このことからも地域活動への参加を増やすには，情報提供をしてきっかけをつくることが重要であり，きっかけづくりとして広報活動を行い，地域を知ってもらうことが必要である。また，Ａ地区では地域住民全員に自治会加入を呼びかけ，未加入者に対して訪問を行っている。自治会未加入者も含め，地域住民誰もが気軽に地域活動に参加できるようにすることが大切であり，そのためには地域住民の目を引くように広報を工夫し，支援者の思いを地域住民に伝え，地域活動に対する住民の意識を高めることが必要である。これらを強化することで，更に多くの住民が地域活動に参加することにつながるのではないかと考えられる。地域住民の参加意欲が高まり，それを反映出来るような地域活動の場の整備や情報の提供等「支援するサイクル」が整っていれば，活動を通してやりがいや生きがいが得られ，自己実現の欲求を叶えることができる。

また，平成12年度国民生活選好度調査では「他

人から参加を強制されないこと」「気軽にできること」が大切であると考える人の割合が８割であり，自分で時間を調整し，無理のない範囲内で行えることが参加につながると考えられている（園部，2008）。活動を始めたいと思う人が負担を感じないような環境づくりと活動内容を配慮することは重要と考えられる。また,「地域保健においては，何をおいてもまず自助が必要となる。ただし，自助のためには，それを実行する能力と実行しやすい環境が必要となる。要するに，周囲の環境を住民が自らの能力を発揮できるように変えていかなければならない」と述べられている（福永，2009）。今回の結果からも，住民のニーズを知り，それが発揮できる環境を作ることが支援の基本であると考える。事業の企画前に活動を支援する側が住民の力量を把握し，能力が発揮できる場を考慮した内容にすることで住民の参加が期待でき，参加者の増加へとつながると推察される。また，保健師は地域住民の自主的な参加を待つだけでなく，地域に足を運び，日頃から地域の人をよく知ることで新たな人材の発掘につなげている。このことからも住民のニーズ・力量を把握することが重要であると考えられる。

地域住民が個人の力を発揮し，充実感や楽しさ，嬉しさ等のやりがいを実感することは，活動の継続につながり『いきいきと活動するサイクル』は円滑にまわる。『支援するサイクル』における個人の支援体制や環境を常に整え，地域の特徴を最大限に活かし，専門職などの住民もその能力を発揮することで地域の活性化につながると推察できる。また，個人と支援する側の関係は，適度な距離感を保ち合ってこそ成り立ち，日常的に相互に関係を持ち合い，境遇を共有し合える関係から，互いの元気を確認し合って今日を自分らしく生きる力を得られる（大森，2008）。人と人のつながりを大切にし，その距離感を保ちながら必要に応じて介入し，ときには見守ることが円滑にサイクルをまわすためには必要であるといえる。

２つのサイクルはどちらが欠けても成り立たない。結果から“いきいき”と活動を続けられる要因の関連性が明らかとなった。健康に影響する個人の社会的な要因とその個人が属するコミュニティのしくみや資源の問題といった地域社会の要因があり，個人とコミュニティのそれぞれのレベルの社会的な要因は相互に関係し合っている（星，2008）。地域活動においてもこれらのことが言える。ひとりの地域住民として健康であり，家族も健康で活動参加への支援が得られること，支援者として地域活動に参加しやすい環境を整えること，地域活動を知らない人への情報提供等が大切である。それぞれのサイクルが円滑にまわるためには，相互に関係し合い，つながることが重要である。

Ⅵ. 結　　論

地域活動を“いきいき”と支える人を増やすためには，『支援するサイクル』と『いきいきと活動するサイクル』の双方が円滑にまわることが不可欠である。支援する側は，住民のニーズ・力量を把握することが重要であり，地域住民の力を最大限に発揮できるような条件を整え，情報を発信し，参加のきっかけを作ることが大切である。

謝　　辞

本研究は平成21年度島根県立大学短期大学部専攻科：地域看護学専攻の授業科目「エンパワメント実習」で行ったものである。研究趣旨をご理解いただき，ご協力頂きました川跡コミュニティセンターの鐘築伸正センター長ならびに坂本君代チーフマネージャーに感謝申し上げます。また，快く調査にご協力くださいました皆様に，心より御礼申し上げます。

文　　献

大森純子（2008）：コミュニティの再構築，月刊地域保健39（1），11.

坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫（2004）：地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性, 東京保健科学学会誌, 7（1），17-24.

佐瀬美恵子（2009）：あったか地域の大家族　富山型デイサービスの15年，日本在宅ケア

学会誌，13（1），13-18.
総務省（2006）：平成18年社会生活基本調査，2010-1-21，http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/pdf/gaiyou.pdf
内閣府国民生活局（2008）：平成20年度 国民生活選好度調査，2010-1-21，http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h20/20senkou_03.pdf
内閣府国民生活局（2003）：平成15年度 国民生活選好度調査，2010-1-21，http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h15/senkoudo15_1.pdf
福永一郎（2009）：地域活動の展開の要素，公衆衛生情報，1012（7），24-26.
星旦二・麻原きよみ（2008）：地域づくりを推進する保健師活動のプロセス　これからの保健医療福祉行政論－地域づくりを推進する保健師活動－，68-69，日本看護協会出版会，東京.
文部科学省（2004）：地域を活性化し，地域づくりを推進するために－人づくりを中心として－，2010-1-21，http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/08/04081301/all.pdf
宮崎美砂子・北山三津子・春山早苗・他（2006）：最新地域看護学総論，128，日本看護協会出版会，東京.
村山洋史，田口敦子，村嶋幸代（2007）：健康推進員のもつ地域社会への態度の関連要因－経験年数別での検討－，日本地域看護学会誌，9（2），24-31.
山崎美貴子（1995）：シニアボランティアの役割・課題・展望，総合ケア　5（10）：6-9.
園部真美・恵美須文枝・高橋弘子・他（2008）：地域住民のボランティア活動に対する意識の実態，日本保健科学学会誌，10（4），233-239.

青山　美保・井手　喜子・新志　春菜・新　　裕美・池田枝里子・池本　佳子
大屋　亜美・河添　千穂・川西　志保・川村　幸子・吾郷美奈恵

Characteristics of People Who are "Lively" Supporting Community Activities

Miho Aoyama*, Yoshiko Ide*2, Haruna Atarashi*3, Yumi Arata*4,
Eriko Ikeda*5, Yoshiko Ikemoto*6, Ami Oya*7, Chiho Kawazoe*8,
Shiho Kawanishi*9, Sachiko Kawamura*10 and Minae Ago

Key Words and Phrases：community improvement, community empowerment, local inhabitants.

---

* Matsue City Hospital
*2 Uji City Hall
*3 Hiroshima City Asa Hospital
*4 Kyoto Kojohokenkai
*5 Murakami Hospital
*6 To-tori Prefectural Kousei Hospital
*7 Kansai Medical University Hirakata Hospital
*8 Matsue Memorial Hospital
*9 Hoki Town Office
*10 Munakata Suikokai General Hospital